

カトリック山手教会月報

やまて



編集・発行 カトリック山手教会 広報委員会 〒231-8652 横浜市中区山手町44番地
 ☎ (045) 641-0735 <http://catholicyamate.org/>
 第619号 2021年9月12日

聖母被昇天 ミサ



使徒的祝福

コロナ禍の8月15日（日）11時30分より、山手教会聖堂で“聖母の被昇天ミサ”がラファエル梅村昌弘司教主司式、保久要師、鈴木真主任司祭、ダリル・サントス・ディニョ助任司祭、西村英樹助任司祭、水上健次助祭による共同司式で執り行われ、ミサの中で「平和を願う祈り～アシジの聖フランシスコの祈りより～」が唱えられました。

梅村昌弘司教 説教

聖母の被昇天 ～平和を祈って～

フランシスコ教皇は、コロナ禍の中で「エゴイズムはコロナウイルスよりも悪質なウイルスだ。世界が今必要としているのは『愛の抗体』だ」とおっしゃられたそうです。正義と平和のために必要な手立てに有効な処方箋は、「愛の抗体」を作り出すことだとの教皇の指摘を皆さんはどのように受け止めますか。

フランシスコ教皇は、かつて「戦場は、まさにわたしたちの心の中にある」とおっしゃったこともありました。「戦うべき相手は、相手にすべき敵は、外にではなく自分の中にある」ということでもあります。争いや諍い、揉めごとの多くが、わたしたちの心の中にある「そねみ（嫉み）」や「ねたみ（妬み）」に起因しているのです。嫉みや妬みをもって漢字では「嫉妬（しと）」という文字になります。人々のこの嫉妬によってイエスも殺されたのです。聖書にはそのように記されています。

ヨハネ福音書では「祭司長たちは『わたしたちには皇帝のほかに王はありません』と答えた」と言われています(ヨハネ19:15)。律法に反する大きな罪。それも公然と。イエスの処刑を求めたのは、自分たちの意にそぐわなかったイエスに対する祭司長たちのねたみによるものでした。そのことがマルコ福音書には明確に語られています。「そこでピラトは『あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか』と言った。祭司長たちがイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。祭司長たちはバラバの方を釈放してもらおうように群衆を扇動した。』(マルコ15:9)。

祭司長たちに扇動され、罪なき者を「十字架につける」と叫んで死に追いやった群衆の姿。一握りの人間に扇動され戦争へと突き進んで行った戦前の市井の人々の中にもこのような姿を見いだすことができるような気がします。戦前、戦意を煽った人々が実際に存在したのです。通常では考えられないような暴力や非人間的な行為へと人々を駆り立

てた戦争。まさに「戦争は人間（われわれ）のしわざ」なのです。1981年、ヨハネ・パウロ二世教皇が来日の時に広島平和公園でなされた平和アピールでおっしゃったとおりです。

「ピカは人が落とさにか落ちてこん」という言葉をご存知ですか。広島の丸木スマという人の言葉です。自ら描いた絵本の最後に記されている言葉です。丸木スマの息子、丸木位里は画家でした。その妻、俊と一緒に描いた「原爆の図」という絵があり、埼玉県東松山市にある丸木美術館というところに展示されています。「ピカは人が落とさにか落ちてこん」。ヨハネ・パウロ二世教皇の「戦争は人間のしわざです」という言葉と相重なります。

戦争は特別な人ではなく、わたしたちとまったく同じ普通の人間がなし得る、人間の業なのです。「殺せ、殺せ、十字架につけろ」。この言葉には、指導者たちによって戦争に巻き込まれ、理性を失い、真理を見失ってしまった人々の根源的な罪が表されているように思います。

神は、みことばをとおして人間が真理に立ちかえるよう回心へと導かれます。自分の周りの多くの人が悪に向かおうとしている時、特に国家として戦争に向かおうとしている時にこそ、みことばの変わらぬ真理を見つめ直す必要があるのではないのでしょうか。

神の真理だと上段に構えても人はなかなか耳を傾けようとはしません。人は愛されることによって心動かされ、その愛に満たされることによって確実に変えられて行くのです。愛をもって生きる時、何か確実に変わっていくことがわかります。イエスの弟子たちは、イエスとの出会いによって神の愛にふれ、まったく新しい生き方へと導かれて行きました。自分を第一として生きる生き方から他者のために共に生きようとする生き方に変えられて行ったのです。平和の実現のためには何よりも「愛」が欠かせません。

最後に心がほっこりとするエピソードをご紹介します。幼稚園のお話です。園児が何かを踏んで痛がっていました。それを見た先生がその子をそっと撫でながら「いたいの、いたいの、遠くのお空に飛んで行け！」と言いました。するとその園児は「お空はダメだよ。おじいちゃんがいるんだから」と

言ったそうです。大好きなおじいちゃんが最近亡くなったそうです。先生はあわてて「いたいの、いたいの、お外の遠くに飛んで行け！」と言い直したそうです。先生が残した最後の言葉。「園児のあまりの優しさに涙があふれてしまいました」という極めつけの言葉です。フランシスコ教皇がおっしゃったように、わたしたちもしっかりと心の中に「愛の抗体」を作らなければと思います。